

巻頭言

「帰国子女教育を考える会」にご支援・ご協力を

会長 小島 勝 (龍谷大学文学部教授)

今年もあと残すところわずかとなりました。あわただしい年の瀬を向かえ、皆様にはお忙しい毎日をお送りのことと存じます。

若輩者の私が僭越にも本会会長をお引き受けすることになり、大きな重荷を背負うことになりましたが、今さら背伸びをしても仕方がなく、私なりに全力を尽くそうと決心して早半年余りの月日が過ぎました。この間、皆様には多大なるご支援・ご協力をいただきまして、心よりお礼申し上げます。

特に、監事をお願いしました、前々会長の坂田良三先生(同志社国際中学・高等学校)、前会長の藤洋白完先生(外務省大臣官房人事課子女教育相談室)はじめ、奥居紀子(立命館高等学校)中井明(ネットワーク地球村)仁井国雄(シャープ)足立堯(海外子女教育振興財団関西分室)立石博幸(三菱電機)西村要(豊中第十一中学校)村田悟郎(枚方市立第四中学校)生野康一(明石養護学校)Anne Perry 山対(甲南女子学園)藤原孝章(報徳学園)の各先生方、そして運営委員をお願いしました、井嶋悠(千里国際学園)加集秀夫(豊中第十一中学校)春日清彦(同志社国際中学・高等学校)上久保達夫(中京短期大学)上月素子(武庫川女子大学・ECHO)佐々多美子(ECHO)立野誠之(城陽市立今治小学校)土肥豊(大阪教育大学)松本順子(かけはし)馬淵仁(大阪女学院短期大学)明神洋(西宮市立小松小学校)山口久仁子(かけはし)山田礼子(プール学院大学)の皆様には、何かと本会の活動に対してお世話をいただき感謝いたします。

お陰様で2回の研究例会を行なうなどの活動を行なわせていただきましたが、この度「通貨」第6号発行の運びとなりました機会に、一言、私の本会の活動・運営に関する所信を述べさせていただきます、皆様方のさらなるご支援のほどをお願いいたします。

本会が発足して今年で8年になりますが、この間の着実な歩みは皆様のご承知の通りです。この会の特色は、なんと申しても、教職員・保護者・企業の相談員・研究者・行政関係者など立場の違いを超えて、等しく「帰国子女教育」に関心をもつ者が集い、情報と意見の交換を行なうことにありますが、私自身会員になって多くのことを学ばせていただきました。日本社会が立場の相違か

「壁」をつくることが多い中であって、共通の関心をもつ者同志がフレンドリーな会を運営し続けてこられたのも、「帰国子女教育」が目指す理念・望ましい人間像によることが大きかったと私は思います。開かれたコミュニケーション・虚心坦懐な本音での意見交換・物事を前向きに捉える積極性と明るさなどの重要性の認識は、私自身がこの教育問題に関わるようになって習得したことでした。実はこうしたことこそが、「海外帰国子女」と言われている子供たちに私たちが期待する特性であり、その教育に携わる者の教育指針であったのではないのでしょうか。様々な異文化の間での生活・学習から自然と身についた、あるいは身につけなければならなかったこの人生態度に、私は大いに共感しましたが、会員の皆様も恐らくそうであったのではないかと拝察いたします。今後とも、本会のエトスであるこの精神を大切にしたいと思っています。

これからの本会の運営につきましては、本通信に監事・運営委員の方々から貴重なご意見をいただいておりますので、私の方からは申し上げることはないのですが、第1回の役員会(6月27日)で決めていただきましたことを指針としたいと存じます。すなわち、(1)研究例会を4回開催して、各話題について活発な意見交換をする、(2)「通信」の充実により、会員のコミュニケーションの広場を形成する、(3)会の活動の宣伝を充実させる、(4)教職員・企業などにネットワークを広げる、(5)行政などにアピールする出版物を作成する、(6)「帰国子女」と「一般生徒」との異文化間相互啓発相互交流の促進についての研究・討論に力を入れる、ということでございます。

「帰国子女が見えにくくなった」と言われる昨今、今一度この教育問題の価値を再認識し、日本の教育の国際化・地球化へ向けてのさらなる着実な活動を行ないたく、皆様方のご協力を切にお願い申し上げます。